

一 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

前にも言いましたが、日本の前近代に孤独はありません。日本だけでなく、それは全世界に共通するものだと思います。なぜかと言うと、「孤独」は近代が発見するものだからです。前近代の①それは、生活共同体を含んで存在する制度社会からの「転落」であって、多分に心理的ニュアンスの強い「孤独」ではありません。制度社会からの転落は、「罪」あるいは「罰」という観点から考えられていて、「個なる転落は罰の最たるもの」と思われてしまうからです。

前近代の「転落」は、②「個人」以前の「複数」で起こります。なにしろここは、「犯罪の連座制」が当たり前の社会なのです。殿様が間違いをしでかしたら、これに仕える一家中の武士と家族は全員「浪人」で、その注どんづまりを解決するために「殿様の仇討ち」という方法を^ア選択するのも、仕方がなからうと思われます。転落した一家は、「一家」という単位を^カカクトクしたまま夜逃げをし、恋人同士は、「恋人同士」という単位をカクトクしたまま、道行をして心中をします。「剥き出しの個になってしまったら発狂するしかない」という^{キョク}キョクタンな認識があるからこそ、日本の前近代の文化は「狂乱物」というジャンルを作ります。ここには「個」という単位がないので、それを選択する個人は、「世を捨てる」出家」という途^{みち}を^と択るしかないので。

前近代には「孤独」というニュートラルな規定はなくて、それは「なにかの因果」か、「罪に由来する罰」です。たとえて言うならば、「魔女の呪いでガマガエルに変えられてしまった王子様」や「一人で眠り続けるお姫様」が「孤独」です。それは、ほとんど「呪われってしまった運命」のようなもので、だからこそこれは、「奇蹟以外に脱出のしようはない」というところへ続きます。その「脱出しようのないもの」を、「脱出のしようはある」と書き直すのが、「孤独」を発見する③近代です。

近代は、前近代の「呪い」でしかないようなものを、「孤独」という状況的で心理的なものに変えます。それがつまりは「孤独の発見」で、発見された「孤独」は、当然のことながら、「呪い」よりもずっと居心地がよかった——だからこそ、自分から進んで孤独を選択してしまうような、不思議な人達も登場してしまうのです。A、「文学青年」や「文学少女」と呼ばれた人達です。

彼や彼女にとって、「孤独から脱出出来ない無能」などというものは、「孤独の中にいられる。甘美」と比べれば、どうでもいいことになります。なぜかと言えば、前近代的な「禁忌」を排除してしまった近代の「孤独」は、その結果、「一人でいてもいい」という赦し^{ゆる}になってしまっているからです。

ここで孤独は、「時間の牢獄」にはなりません。そうなってしまいう人ももちろんいたでしょうが、その以前に孤独は、「自分だけの歌を唄える楽園」になっているからです。

かくして、「孤独」というものを発見した近代は、センチメンタリズムという美意識を生みます。つまりは「やるせなさ」で、この言葉をじっと見ていると、日本人の実際性がありありと分かります。「やるせなさ」は「遣る瀬ない」で、「舟を渡す場所がない」手段が見つからない「無能」だからです。「センチメンタリズム」心理^{メンタル}的なものを感じる^{セン}が「無能の美」になってしまうなんて、実際性の限りではありませんか。

現代というのは、その後にやって来ます。だから、我々のいる現代から「孤独」というものを発見した近代を振り返ると、あることが分かります。つまり、「近代になって発見された孤独は、あるプロセスの一部として存在する」です。

それは、「呪い」でも「罪」でも「罰」でもなく、「個の自覚は必要である」というところから「孤独」は発見されて、それは、「人間は孤独を乗り越えてなんとかなる」というプロセスへと続きます。それがつまりは、「成ベルトランクス長」と呼ばれるもので、だからこそこのプロセスを書くものは、「教養小説」と呼ばれました。手っ取り早く言ってしまうと、「みんな悩んで大きくなった。お前も挫くじけずに頑張れよ」です。この基本モチーフがあったればこそ、十九世紀から二十世紀の半ばくらいまでは④「発展の時代」になれたんだろうと、私なんかは思っています。

「孤独」を発見した近代は、これを「なんとかなる」の前のプロセスとして位置付けたのです。私は、そのこと自体、間違っていないと思います。

B、この単純明快な基本原則は、あるところで壁にぶつかります。——それが、二十世紀の後半です。はじめは「大衆化の時代」だのなんだのと言われますが、つまるところは、「成ベルトランクス長も教養小説も役に立たない」という⑤壁の出現です。

なんでそうなるのかというと、別にむずかしい話ではありません。「みんな悩んで大きくなった」はいいけれども、「お前も挫けずに頑張れよ」路線で大人になった青年達が、ろくなオヤジになれなかった——ならなかったというだけのことです。

「自分は、ろくなオヤジになっているのか、いないのか？」——当人にとって、これはむずかしい自己の対象化を必要とする問いですが、はたから見れば、この答は明らかです。「あんなはろくなオヤジじゃない」と息子や娘に言われてしまえば、それまでです。一九六〇年代末の「若者の反乱」はかくして起こるのですが、それは間もなく新しい展開を迎えます。反乱した「若者達」の一部である「女」というところから、新たな火の手が上がるからです。それは、「世界はろくでもないオヤジ達で満ち満ちているけど、それを言うあんた達だって、ろくでもないオヤジ菌に。オセンされてんじゃないの？」という批判でした。

若者はオヤジ達のろくでもないさを批判して敵対し、女は、その若者の中にある「男」を、ろくでもないものとして批判し、敵対する。社会の中に批判と敵対の連鎖反応が起こって、すべてはここで終わりのように見えますが、その混乱の中に、⑥Uターンの展開がすぐに現れます。男を批判した女達が、「人の批判ばかりしても仕方がない。もしかしたら、文句を言ってる私たちには文句を言うしかない」という立場の脆弱さがあるかもしれないと、批判の鋒先ほこを自分達に向けるからです。「女のあり方」と連動して、「自立」という考え方が表に出ます。重要なのは「自立」ですが、これがあまり重要とは思われませんでした。だからこそ、「孤独」の存在するプロセスが見えなくなってしまったのです。

(橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』)

注 どんづまり……物事がうまくいかないでぎりぎりの所まで来ること。

問一 傍線部 a、e について、カタカナは漢字に改め、漢字は平仮名でその読みを答えよ。

問二 空欄 A、B に入る言葉として適当なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア ところが イ あるいは ウ だから エ つまり オ さて

問三 傍線部①「それ」の指示するものを本文中から二字で抜き出して答えよ。

問四 二重線部ア「選択」とイ「因果」と熟語の構成が同じものを次の 1～6 よりそれぞれ
選びなさい。

1 登山 2 地震 3 非常 4 柔軟 5 再開 6 賞罰

問五 傍線部②「個人」以前の「複数」で起こります」とあるが、それはなぜか。その理由を解答欄（くから）に合うように本文中から十一字で抜き出して答えよ。但し、括弧なども字数に含むこととする。

問六 傍線部③「近代」になって生まれたものは何か。本文中から十五字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部④「発展の時代」になれたんだろう」とあるが、そう考えた理由として最も
適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア この時代には、孤独を紛らわすことで気にしなくなる、という楽観があったから。 3
イ この時代には、孤独を克服することで何者かになれる、という希望があったから。
ウ この時代には、孤独などを考えている暇などない、という焦燥感があったから。
エ この時代には、孤独と向き合うことで価値を見出せる、という期待があったから。

問八 傍線部⑤「壁の出現」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、
記号で答えよ。

ア 努力を続けてきたことによって、ろくなオヤジになれた気になっていたから。
イ 逃げずに悩み続け、自信を失い、ろくなオヤジになれた気がしなかったから。
ウ 頑張り続けて成長してきた一方で、結局はろくなオヤジにならなかつたから。
エ 考え続けたけれど自分なりにろくなオヤジになれたのが疑わしかったから。

問九 「孤独」の変遷として適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 心理的ニュアンス ↓ 楽園 ↓ 時間の牢獄 ↓ 若者の反乱
イ 存在しない ↓ 狂乱物 ↓ プロセスの一部 ↓ 若者の反乱
ウ 心理的ニュアンス ↓ 狂乱物 ↓ 時間の牢獄 ↓ プロセスの不認識
エ 存在しない ↓ 楽園 ↓ プロセスの一部 ↓ プロセスの不認識

問十 傍線部⑥「Uターンの展開」とあるが、それはどういったことか。「批判」の「連鎖
鎖反応」および批判内容が分かるように六十字以内で説明せよ。

二 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

赤飯に鯛の^①おかしらつき朝食を終えた頃、ぼつぼつと雨が降りだした。

「まあ、^②雨降って地固まる、っていうから……」

アサダ氏は窓の外を眺めていたまなざしを長女に移し、いまつぶやいた言葉をもう一度、今度は娘に向けて、くり返した。

「あなたの涙雨だったりして」

奥さんが食後の焙じ茶をいれながら、からかうように言った。

「ばか言え」アサダ氏はそっけなく返す。「くだらんことはいいから、早くも支度しろよ、もうすぐ車来るぞ」

とはいっても、迎えのハイヤーが来るまでにはあと一時間以上ある。なにごとにつけても

*な性格である。若い頃から、定年を二年後に控えたいまに至るまで、ずっと。

お茶を一口啜り、あぐらを組んだ膝を軽く揺すって、あわててズボンの膝をつまんで皺を伸ばす。^③やはり礼服に着替えるのは早すぎたかもしれない。いや、それよりも、奥さんの勧めるとおりホテルの更衣室で着替えることにすればよかったのだ。

奥さんと長女は顔を見合わせて、（A）と笑う。その隣では、大学二年生の長男が、ふてくされたような面持ちで初物のビワの皮を剥いている。いつもは息子の仏頂面を見るたびに小言の一つもぶつたくなってしまいうアサダ氏だが、^④今日はなにも言うまいと決めていた。

四人家族が、今日を最後に三人になってしまう。息子がふだんにもまして無愛想になる気4持ちも、わからないではない。奥さんが六個で二千円近いビワを買ってきた気持ちも。

お茶を、もう一口。「あなた、ビワ冷たくて美味しいわよ」と奥さんが声をかけたが、汁がズボンや上着に垂れ落ちると困る。

お茶を、さらにもう一口。

朝食が終わっても、家族の誰も席を立たない。（B）とアサダ氏を見ては、目が合う寸前にぎこちなくそっぽを向く。

わかっている。

なにか一言——言うべきなのだろう。

「春香」

長女を呼んだ。春の香りで、春香。息子は八月に生まれたので夏彦。どうせならもつと凝った名前を付ければよかった、と親子の日々が終わりがけた頃になって悔やむ。

ビワに手を伸ばしかけていた春香は、奥さんに目配せされて居住まいを正した。夏彦も、ふだんはなにかと気が利かなくせに、リモコンでテレビの音量を少し落とした。

だが、そんなふう待ちかまえられると、プレッシャーを感じてしまっ言葉がうまく出てこない。*なアサダ氏は、挨拶だのスピーチだのといったものが大の苦手な性格でもあるのだ。

「まあ、あれだ……」と言って天井を見上げ、いやいやこういうときに目をそらしてどうする、と自分を叱って、再び春香を見つめた。春香は神妙な顔で座っている。二十五年間、育ててきた。ずっと一つ屋根の下で暮らしてきた。大安吉日の今日、嫁いでいく。

「いろいろ大変な世の中だけどな、まあ、元気でやれ」

つまらない言葉だ。自分でも思う。さすがに春香は神妙な顔をくずさなかったが、奥さんと夏彦は、あーあ、と肩から力が抜けたふうに⑤頬をゆるめた。

それを見て、アサダ氏、頭に（C）と血がのぼった。

「いや、おまえ、それがいちばん大切なんだよ、元氣だったら少々貧乏してもがんばれるんだ、うん。そうだろう？ お父さんずつと言ってるだろ、人間元氣がいちばんなんだ、つて。それはもうずつと変わらないんだ、変わっちゃいけないんだ、そうだろう？ 幸せなんてのはな、時代時代によつて変わるし、ひとそれぞれなんだ。だから、お父さん、春香が幸せだったらなんにも言わない。おまえの人生なんだから好きにすればいいんだ、あとから助けてくれなんて言ったって、お父さん知らないぞ、おまえが勝手に結婚するつて決めたんだから、最後まで自分でがんばれ、親をあてにするな、いいな、だいいち春香、おまえは結婚式のことも一言も相談せずに勝手に勝手に決めて、お父さんだつて会社のひとの手前、いろいろあるんだよ、そんななあ、おまえ、自分一人で大きくなったような顔してるけど、そんなの大きな間違いだぞ、わかるか……」

なにを言ってるんだ、俺は。

自分でもよくわからない。頭に血がのぼったまま、早口の言葉が勝手に唇からこぼれ落ちていく。

もつと明るく、優しく、包み込むような言葉をかけてやるはずだった。『愚痴めいたことは言わないつもりだった。』

もつとも、アサダ氏が後悔するほどには、家族三人は父親の暴走を気に留めてはいない。いつものことである。

いつものままで見送られることが、じつは娘には嬉しかったりもするのである。

「お父さん」春香が言った。「結婚の話でずーつとばたばたしてたんだから、しばらくゆっくり休んでね」

引き取って、奥さんも「人間ドック、ほんとうにお願いしますよ」とアサダ氏を軽くにらむ。

夏彦まで「これで一気に老け込んで、ボケたりしないでよ、マジ」とビワの種をキャンデーのように口に含んで言う。

アサダ氏はむつとして、けれど、頬はついゆるんでしまう。

家族だ——と思う。

あたりまえのことが、あたりまえだからこそ、今朝は胸に沁みる。

「さ、そろそろ支度しないと」

台所にひきあげる奥さんの言葉をしおに、春香は妙にあわてたそぶりで立ち上がり、居間を出ていった。

逃げ遅れてしまった夏彦は、ビワの種を皿に出して。コシを浮かせかけたが、親父一人を残すのがためらわれたのか、「もう一個食おうつ」とひとりごちて、⑥また尻を落とす。

しかし、息子と二人きりになるのも、父親としては気詰まりなものである。

アサダ氏は朝刊を手にとって、⑦テレビ欄をざつと眺めた。

問一 傍線部 a、e について、片仮名は漢字に改め、漢字は平仮名でその読みを答えよ。

問二 傍線部①「おかしら」とはどの部位を表すか、次の中から選び、記号で答えよ。
ア 頭と尾 イ 骨と皮 ウ ヒレと内臓 エ 目と鱗(うろこ)

問三 傍線部②「雨降って地固まる」の意味として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 悪事や欠点をすっかり隠したつもりでも、その一部が表れていること。
- イ 悪いことが起こった後に、かえって良い状態になること。
- ウ 何かする前はあれこれ心配していても、実際にやってみると簡単にできること。
- エ 自分の悪事が原因で苦しんだり、ひどい目にあうこと。

問四 傍線部③「やはり礼服に着替えるのは早すぎたかもしれない」について、なぜ礼服に着替えなければならなかったのか。その理由を十五字以内で答えよ。

問五 傍線部④「今日はなにも言うまいと決めていた。」について、なぜなにも言うまいと決めていたのか。六十字以内で答えよ。

問六 * にあてはまる語として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア お節介 イ 引っ込み思案 ウ せっかち エ 感情的

問七 (A) (B) (C) にあてはまる言葉をそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。
1 カツ 2 げらげら 3 ちらちら 4 クスツ 5 じろじろ

問八 傍線部⑤「頬をゆるめた」について、この時の奥さんと夏彦の心情として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア アサダ氏の失敗を隠そうとする気持ち。
- イ 頼りないアサダ氏を残念に思う気持ち。
- ウ いつも通りのアサダ氏を微笑ましく思う気持ち。
- エ 春香が残念に思っていないか心配する気持ち。

問九 傍線部⑥「また尻を落とす」について、なぜ夏彦はまた尻を落としたのか。この時の夏彦の心情を四十文字以内で答えよ。

問十 傍線部⑦「テレビ欄をざっと眺めた」について、この時のアサダ氏の心情として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 娘が嫁に行くことを拒絶する気持ち。
- イ 家族を大切に思う気持ち。
- ウ 息子と二人きりになる気まぐさを隠そうとする気持ち。
- エ 夏彦の態度の悪さを我慢する気持ち。

問十	問九	問六	問五	問四	問二	問一	二	問十	問七	問六	問五	問二	問一	一
						a						A	a	
		問七			問三	り			問八			B	b	
	30	A	30			b		30						
		B							問九			問三	c	
		C	60	10	10	c		60		10	10			
	10										から	問四		
		問八				ち						ア	d	
	40		40			d		40				イ	e	
						e								
	20		20					20						
			50					50						

令和四年度 郁文館高等学校・郁文館グローバル高等学校入試
 番号 氏名

問十	問九	問六	問五	問四	問二	問一	二	問十	問七	問六	問五	問二	問一	一
ウ	にしア てダサ お氏が けが誰 なより いとも 思っ寂 たしが たがつ めつて い る こ と に 気 づ き 、 1 人	ウ 問七 A 4 B 3 C 1 問八 ウ	で 寂 4 し し 人 さ さ 家 か か 族 ら が 3 い つ 人 も に な る り る 寂 し さ は ア サ ダ 氏 も 感 じ て お り 、 解	娘 の 結 婚 式 に 出 席 す る た め 。 夏 彦 の 気 持 ち も 理 解	ア 問三 イ	a くり b したく c おももち d ぐち e 腰		な 判 オ っ し ヤ た て ジ と い 達 い た の う 女 ろ こ 達 が で 。 自 分 達 の 立 場 の 弱 さ を 批 判 す る よ う に	イ 問八 ウ 問九 エ	セ ン チ メ ン タ リ ズ ム と い う 美 意 識	「 個 」 と い う 単 位 が な い から	A エ B ア 問三 孤 独 問四 ア 4 イ 6	a 獲得 b 極端 c かんび d きんき e 汚染	

令和四年度 郁文館高等学校・郁文館グローバル高等学校入試
 番号 受験
 氏名